



1987年(昭和62年)
6月号(No. 504)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- ピッケルの渡来と製作(上)
- 広瀬 潔……………(1)
 - 海外の山……………(2)
 - 蔵書のゆくえ(下) 近藤信行……………(2)
 - スキー登山中の負傷者の搬送 四手井靖彦……………(3)
 - 「米さん」のこと 小野 幸……………(4)
 - 追悼「辻莊一氏」(中村太郎), 「河本清氏」(松田雄一)……………(4)
 - 中屋健式さんの想い出 田口二郎……………(6)
 - 東西南北……………(6)
 - 「ヒマラヤン・クラブの紹介」 「日本山岳協会展」「ネパール神々」と舞踊劇展」「山岳写真の源流展」 松本アルプス山岳館保管資料(7)~(9)
 - OA 委員会からのお願ひ……………(8)
 - 報告「京都支部だより」「図書室の利用と現状について」……………(8)
 - 新入会員・会員住所変更……………(9)(10)
 - 会務報告・ルーム日誌……………(10)
 - お知らせ「映画会」「カナダキャンプ」「探険山行」「もみじ会」……………(11)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時~20時

ピッケルの渡来と製作(上)

広瀬 潔

はしがき

登山家はピッケルに強い愛着心を持つている。創立八十周年に当って、門田ピッケル百本記念製作分譲計画を発表したところ、五倍の希望者が現れたのをみてもよく分かる。それに興味をひかれ、「ピッケルはいつ頃から日本に渡来たのか」、また「いつ頃から国内で製作されたのか」、一応探ってみた。(歴史的記述に付、全文敬称省略)

シールトとピッケル
シールト(一七九六~一八六六年)はドイツの医学者で、一八二三年(文政六年)オランダ商館の医員として長崎に着任したが、鳴滝にも塾を開き高野長英らに医学を教授するがたわら、日本人の

治療にも当った。また博物学者として日本の動植物を調べる外、地理・歴史・言語なども研究し、帰国後「日本」「日本動物志」「日本植物誌」を著作し、広くヨーロッパに日本を紹介した。

特に日本の最高峰富士山の高さに関心が強く、来朝時予め測量器具はひと通り持参してきて、その機会をうかがっていたが、何分幕府の警戒が厳しく、自身登山するわけにいかなかった。それで弟子の二宮敬作に代行させることになったが、夏期は人目が多いので、春期に登山する計画を立てた。ところが積雪期の登山具は用意して来なかったため、早急に古来日本の雪国で使われている道具「カモシカ皮の袖なし・しし手袋・ゴン

ソウ・背負袋・カンジキ等)を集め、これを使って、二宮敬作が文政十一年(一八二八年)四月(新暦五月)、積雪期の富士登頂に成功した。従ってこの登山には「ピッケル」は使われていない。

(注1)平柳一郎によれば、ヨーロッパでもモンブラン試登の頃から足場を切る斧(ウッド・アックス)や氷河渡りのアルペン・ストックはあったが、「ピッケル型の杖」は一八六五年(慶応元年)ウィンバーのマッターホルン登頂以降に一般化された。ギ・ド・モーパーツァン(一八五〇~一八九三)の短編「山の宿」にもアルペンストックと足場切りの手斧のことが記されているとのことだ。

(注2)二宮敬作は富士山頂で標高を「三七九四」と測っている。現在とは僅か二〇メートルの誤差(高過ぎ)だ。当時としては驚くほどの精密さといえる。

(注3)この二宮敬作の登山は、当然日本の最高峰積雪期登山に残留されてよい記録と思われるが、何分幕府の警戒裡に行なわれた秘蔵登山だ。記録が残っている。

維新後、明治政府はヨーロッパの先進国の人達が日本にやってきた。そのなかには何人かの登山家があった。当然「ピッケル」の渡来が考えられる。現に明治六年、神戸の六甲山にガウランド、アトキンソン、サトウの三名がピッケルを携えて登り、また明治二十年かにH・W・ベルチャーが「ルック・山靴・ピッケル姿」で岡山市内に現れた。それを見た日本人の

ウエストンは明治二十五年五月十九日、富士登山をしているが、その際ピッケルを使ったと思われる紀行文を残している。

同年(一八九二年)発行のアルパイン・ジャーナル第一一九号のウエストン「Fujitama in May」(昭和三十三年四月発行アルプの広瀬訳「五月のフジヤマ」)によれば、ウエストンは御殿場で大夫三名を雇い山麓、太郎坊で一泊。翌朝登山中、人夫一名脱落、残りの二名も草鞋ばきのため雪の急斜面にかかと滑って登行困難になったため、ウエストンは「先頭に立って、登り易いように、いくつか足場を切つてやった」と、書いています。

ピッケルを使ったものと思われる。(なおこの人夫二名も間もなく脱落したので、ウエストンは同行者フォルダムと二人だけで快晴の山頂に登り、海山の珍らしい展望を満喫している)。

お知らせ電話 234六六五九

う文字はひと言も出ていない、と西岡一雄は「登山の小史と用具の変遷」に書いています。

ウエストンはピッケルを帰国の際、日本に残していったのか、本国へ持ち帰ったのか不明。後年(昭和九年頃)広瀬潔が小島島水に尋ねたところ、「外人は帰国の際に、家財道具をいっさい売り払っていったから、ウエストンもピッケルを日本に残していったかも知れない。もしそうだったら買い取っておくべきだったが、私もそこまで気がつかなかった」と。

ウエストンは大正二年、槍、霞沢、奥穂高に登っているが、槍へ出発する朝、上高地河童橋の上で撮った写真が残っている。パナマ帽を被り、白い夏シャツを腕までまくし上げピッケルを杖にしたウ

エストンの左側に上条嘉門治、妙義の根本清蔵、右側にウエストン夫人が並んでいる珍らしい写真だ。旧一高旅行部の大木操が撮影したもので、梓書房発刊「山」(二の一号)に載っている。高橋文太郎著「山の達人」にも再録されている。

その時のウエストンがついていたピッケルについて、平柳一郎は次のように推論している。『あのピッケルはフリッツ・エルク(FRITZ ELK)だと思ふ。ウエストンはその外、初代フツフアウフ(A. FUPFAUF)も持っていたらしい。なお嘉門治伝承の氷斧の形状は石突がワンピースで、フツフアウフに似ている。エルクはツーピースだ』と。

(以下次号)

蔵書のゆくえ(下)

―三人の図書委員長のこと―

近藤 信行

故深田久弥氏の蔵書のうち外国語文献は、丸善古書部をおして国立国会図書館におさめられた。いまその蔵書目録をとりだしてみると、歴史、地理、民族学、登山(書目、辞典、登山史、登山技術、総説その他)、紀行一般(探検記、航海記をふくむ)、地域別にした登山・探検の紀行・記録のほか、伝記、宗教、芸術、語学・文

学、カーマストラ、雑誌などに分類されている。目録は昭和五十年十一月、「山の文庫展示会」の開催と同時に刊行されたから、手続とか整理・分類などで五年ちかくの時間を必要としたのである。それにしてもヒマラヤ史、探検史を世界的動向のなかで位置づけようとした深田さんならではの蒐集品であった。

海外の山

モンゴル人のエヴェレスト

「モンゴルの登山家がエヴェレスト登頂計画を進めている」
そんなニュースがモンゴル・プレスによって伝えられたのは昨年十二月のことだ。

「計画では一九九〇年に実施、目下登山隊メンバーの選考が慎重に行なわれている。責任者のR・ゾリグ氏は、この二、三年間は若い登山家に六、七千級の高峰登山体験を積ませることが目標となる、と語った」
モンゴル人民共和国は、百五十六万平方キロの広大な国土に百九十一万人の人が住む高原の国である。アルタイ山脈の主峰タボン・ボクド(四三三七七)をはじめ三、四千級級の山々をかかえるこの国に、日本からは一九六八年に東京外語大学隊が、一九八五年には北海道のメンバーを中心とする日本モンゴル友好親善登山隊が訪れている。登山人口がどのくらいかは不明だが、モンゴル・プレスは一九六〇年代に登山の国際交流が始まり、タトラ山群(チェコ・ポーランド国境)、コーカサス、パミール、アルプス、それに日本などにモンゴルの登山家達が踏み跡を残したと伝えている。

一九七三年、外語大山岳会が返礼としてゾリグ氏を隊長とする五人のモンゴル登山家を招待した時、一緒に北ア・五龍岳に登ったことがある。雪の遠見尾根のアプローチに、技術的な困難はなかったが、それよりも驚かされたのはモンゴルの山男の腕力の強さと視力のすごさだった。石上げ、石投げどちらも我が日本勢は全く歯が立たず、はるか彼方の人影をすばり名前で当てるのも

モンゴル人でしかなかった。
そのモンゴルの山男達がエヴェレストを考えている。これまでもつぱらインド、ネパール、中国、日本、韓国など、領域にヒマラヤをかかえるか、あるいは、いわゆる先進工業国に限られていたアジアの「登山国」に、モンゴルのような人口の少ない、従って決して登山人口も多とは言えない国が加わることは、素晴らしいことである。

言われている通り一九九〇年に実施できるかどうかは別にして、「チョモロンマ」が山名として報道されていることからルートは北側、つまり中国側からとなる可能性もある。とすれば、近年改善が伝えられる中国・モンゴル間の接近度がこの話の背後には微妙に関係しているとも受け取れるのである。

一九八五年の北海道隊の報告書「遥かなるモンゴルの山旅」には、登山許可を取って実際にハンガイ山脈の最高峰オトゴンテインゲル(四〇三一一)に立つまで十年に及んだ準備期間の苦労が語られている。過去の探検小史や文献などについても触れられ、時間をかけた登山の良い面が出ていくように思われる。

モンゴル人がヒマラヤに進出するまでは、もちろん十年ではきかない。六、七千級峰の経験といえは全て友好国ソ連の国内においてであり、ヒマラヤに登山隊を派遣したケースはない。

モンゴルの登山家達のエヴェレスト計画は、将来ヒマラヤにもっと多様な国々の人が集まるだろうことを想起させて楽しい。南太平洋やアフリカから新たな登山家集団がカトマンズやラサハへやってくることだってあり得るだろう。東京や北アルプスで交歓したモンゴルの山男達は、ユーモアにあふれた好漢ぞろいだった。彼らが自力で登るエヴェレストに声援を送りたい。(江本嘉伸)

その資料探索ぶりは実にすさまじかった。外国の古書店からカタログがくると、血眼になって欲しい本を書き出し、すぐさま発注する。オーレル・スタインの『セル・インディア』とかシユラギントワイト兄弟の『印度および高地アジア踏査報告』とか、あるいはダンヴィルの地図などを手に入れたころ、松方三郎氏は「ここまで行く普通の人間はもう置いてきぼり」と嘆声をあげたほどであった。深田さんはヒマラヤ関係の本のほかに、『スタンダード全集』『バルザック全集』のような大部の個人全集もあたらしいテクストで購入していたから、山と文学の書齋生活をたのしんでおられたのである。

ほかからなんの援助もなく、定収入のない原稿料生活者にとつて、その購入費はたいへんなものである。深田さんはたえず家計を圧迫しているといひ、「まだ本屋の借金が数十万円も残っている」と書いたこともあったが、志げ子夫人のほうもなかなかのつわもので、且那の『本道楽』についてほとんど愚痴をこぼさなかった。「すこしはバーにでも行って、遊んでくれたほうがいいのよ」と笑いとばすありさまだ。私が直接にかかわった一例をあげると、昭和三十一年の夏のこと、志げ子さんが『ヒマラヤー山と人』の印税をとりにもえたことがあった。深田

さんからの手紙で早目に出してくれないかといわれていたので、経理部で小切手をつくってもらって待っていると、志げ子さんはそれをすぐさま丸善に運んだのであった。その大部分は「アルパイン・ジャーナル」全揃のためにつかわれたのだが、その点、実に健気な方であった。

深田久弥氏亡きあと、志げ子さんは九山山房の洋書の処分を丸善に寄託した。これまたみごとな早業であった。孜孜営々と蒐集をつみかさねてきた蔵書主のことをおもうと、一沫のさびしさをおぼえぬわけにはいかなかったが、いともあっさりとい断を下したのである。

「久弥が生きていたころよりも、死んでからのほうが、暮しは楽になったわ。本を買わなくなったから……」
天真爛漫で、なにごとにつつまかくしておけないという性格の志げ子さんは、これまたあっさりと言つてのけるのだが、おそらくこんな言葉のなかに本音があったとおもう。

それにしても、人の志にくらべて人の命のなんと短いことよ。深田久弥氏はヒマラヤ研究の延長として取りくんだ中央アジア研究の中道で斃れている。山岳書の総合研究をめざした小林義正氏は、死期を感じとつて、御自分の蔵書をもつともふさわしい方におゆ

スキー登山中の

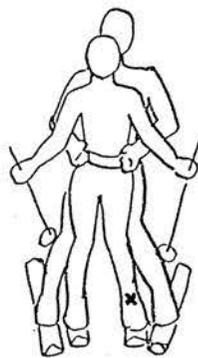
負傷者の搬送

四手井 靖彦

スキー登山中に負傷者が出た場合、どのような方法で下山させればよいだろうか。自分自身の交通事故を想定している人がいないのと同じように、登山中のアクシデントも、意識のなかでは常に他人事である。しかし、現実にはパーティのなかに負傷者が出ると、なかなか厄介な問題になる。三月上旬の新聞に、比良の武奈ヶ岳でスキー中、左足を骨折した会社員に、神戸の三十六人のパーティが出会ったが、近くのスキー場まで運び出すことができなかった、という遭難記事が出ていた。結局、パーティの一人がアマ無線で救助を求め、約四時間後に地元の山岳救助隊が出勤して助け出されている。雪の量や質・地形の問題もあり、一概には言えないが、三十六人もいて一人の負傷者を動かせなかったことは疑問が残る。このアクシデントについていえば（負傷者は多分単独行と思われ）、他のパーティに出会えたこと、無線機所持者がいたことなどラッキーな面もあるが、一般的には、負傷者は当事者の手によって一刻も早く下山させ、専門家の手当を受けさせるのが望ましいのではないだろうか。

この遭難が話題になったばかりの三月下旬、岐阜県・石徹白の野伏ヶ岳から下山中に、自分たちのパーティに負傷者を出してしまった。参考になることもあると思われるので、この時の搬出方法について報告する。

頂上から滑降を始めて間もなく、八人のパーティの、紅一点が転倒して左足首に負傷した。標高約一五〇〇が、午後二



(×印が負傷箇所)

時過ぎであった。外傷はなかったが左足首の自由が効かず痛みがあった。のちの診断で「外果骨折」とわかったが、現場では捻挫とか骨折とか、詳細は不明であった。とりあえずテーピングで患部を固定し、痛みをおさえたが、そのまま尾根筋で滑降を続けるのはむりであった。本人の気力が十分だったので、谷の緩斜面で長い距離をとって片足加重による斜滑降を試みたが、自力でキックターンができず、いちいちスキーを着脱させるのは面倒であった。そこで次にやってみたのが負傷者のスキーを挟み、後ろから抱きこむような格好で滑る方法である。以前にこの方法をやったことがあり、効果的だったというパーティの一人の提案だった。サポーターはストックを使わず、両手で負傷者のベルトを強く支える(図)。ターン時にはサポーターは全制動の姿勢を取り、負傷者の体重を吊り上げ気味にして負担を軽くする。負傷者は患部の側の足にできるだけ体重がかからないようにするが、スキーは両方とも付けた方がよい。スキーをはずした足がぶらぶらすると、転倒したときなどにむしる衝撃が大きいのと思われる。

両者の呼吸が合えば、ほぼサポーターの意のままに全制動ターンが可能である。緩い登りや平地

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

ずりになった。その生涯をかけて打ちこんできた方の畢生の主題をおもくと、かえすがえすも残念なことだが、その大きな志は後代のだれかが受けつがねばならぬものだ。日本山岳会はそのような伝統のなかで生きてきたし、これからもそこに生きつづけるであろう。昭和六十年三月、山崎安治さんが亡くなられた。『新稿日本登山史』は歿後に刊行されたが、日本登山史にかけた情熱はみごとにも

「米さん」のこと

小野 幸

村井米子はペンネーム、本名は村井米。だから私にとっては先輩であったが「米さん」で通してしまっただけ。はじめてお会いしたのは戦前、日本放送協会（J.O.A.K.）にいられたときで、その頃は都庁（旧市役所）で都内の年中行事を毎月一回、役所内の記者クラブに提供

のであった。もつともつと多くの発掘をなされ、多くの研究をまとめられるであろうとおもっていたが、その急逝はまことに残念である。歿後、房子夫人は山崎さんの蔵書を図書委員会に寄託された。大橋晋、岩瀬皓祐、泉久恵の三君をはじめ委員諸氏の尽力で、ようやく分類・整理をおえたところだが、その経緯についてはあらためて報告することにした。

する仕事もしていた。でもその資料は骨だけのもので、例えば「佃の盆踊り」とか「世田谷のボロ市」と記すだけだったので、その内容や由来のわからないものは電話できいてくる。そのなかに「村井ですが」と女の声での問い合わせもいたっていた。だからま

追悼

名譽會員

辻 一 さん

追 悼 し て

辻一さんは、一九八七年四月二十一日午後十時、聖路加国際病院で九十一歳の天寿を全うされ、昇天された。

私は辻さんを偲んで、久しく山を遠ざかってい

ではロープで引張った。この場合、負傷者は自力での走行はせず、牽引者に任せてしまった方がよくしやくしなくてやりやすい。この方法で雪がなくなり、車の停めてある白山中居神社近くまでスムーズな搬出ができた。途中、雪の途切れた三箇所はおんぶしたが、つづれおりの林道での滑降も問題はなかった。高度差約八〇〇が、時間は約二時間半であった。テーピングの用意をしていた初期の処置が適切にできたこと、この搬出方法の経験者がいたこと、負傷者自身も山スキーの経験が豊かであるなど好条件がそろっていたのが幸いだった。骨折などの事故に際しては、すぐソリによる搬出を考えるが、スキーを使ったソリの組み立ては慣れていなければむずかしい、搬出技術も容易ではない。負傷の程度にもよるが、スピーディかつ省力的なこんな方法があることは知っておいてもよい。下腿部で、立てる状態なら、明

る。その頃は家庭向番組の主任をされていた。勿論、ヤマ（愛宕山）の時代であった。それから間もなくおつき合いをさせていただくようになった。戦後間もなく国立公園の審議会委員になられ、武田博士や冠さんなどの委員とお近づきになってか

ら早速J.A.C.に入られたのであった。「小野さん山岳会へ入るわよ」とお茶のみながらニコニコされていたのが思い出される。入会されるや、ひとり身の気安さから（でもA.K.の仕事もあったが）役員に任命されて婦人部でよくはたらかれたし、東京支部（今はない）でもお世話をやかれていた。その頃から私は成城のお宅へあそびにうかがうようになった。庭には草花もうえられ静かなおすまいであった。本もすこしあり「インテリさんですね」とひやかしたこともあった。「柳田先生の家も近くなので、たまにうかがうのよ」とも聞いた。この方は民俗研究家で元会員であったが、故人

らかに骨折とわかる程度でも、副木を使って固定しさえすれば可能であろう。最終的なけがの程度は、金属を入れて固定するため手術と七日間の入院。一カ月のギブス、さらに一年後に金属を取り除く手術が必要という重傷であった。事故の直接の原因はビンディングのセイフティ機能が働いていなかったことによる。シールをつけた登高時に、締め方が緩いと感じたため、登高中に調整し直した。この時締め過ぎの状態になり、転倒時にリリースしなかったと思われる。ちなみに、ビンディングはジルブレッタ三三〇〇である。この型は上下方向のセイフティ機構は働くが、左右方向にはきかない。また、慣れないと微調整が難しいともいわれる。

(一九八七年四月)

る友人を誘い、赤城山・黒松山に登ってきた。大沼のほとりから登って行くと、日陰に雪が残り木々はまだ芽吹いていないが、繁殖期に入った鳥の囀りは盛んであった。さほど遠くない有料道路を走るオートバイの走行音もけたましく聞こえていた。辻さんは私が生れた年に「山ばなし」の中で「赤城山に熱中して度々行って見たけれども」すずで「益々悪く近代的になっていく」といって悼

「小野さん山岳会へ入るわよ」とお茶のみながらニコニコされていたのが思い出される。入会されるや、ひとり身の気安さから（でもA.K.の仕事もあったが）役員に任命されて婦人部でよくはたらかれたし、東京支部（今はない）でもお世話をやかれていた。その頃から私は成城のお宅へあそびにうかがうようになった。庭には草花もうえられ静かなおすまいであった。本もすこしあり「インテリさんですね」とひやかしたこともあった。「柳田先生の家も近くなので、たまにうかがうのよ」とも聞いた。この方は民俗研究家で元会員であったが、故人

悼の山は、半世紀をはるかにこえた歳月の中にはるかになっていた。

辻さんは、一九二三年立教大学山岳部創立と同時に部長になられ、一九四五年まで二十二年間、部の責任をとっておられた。立教の山岳部は一九二八年頃から、逸見・堀田・小原・山縣・浜野等、学生登山界の元氣者をようし、日本アルプスの積雪期の登山を活発に行なっていた。この記録は「立教大学山岳部報」追想号から第八号にわたって収録されている。辻さんがいう「白熱的登山」は、辻さんにたえず危惧の念を抱かせたようである。しかし、辻さんはかえってよく理解し、積極的に支持されていた。むしろ、冒険的ともいえる部員たちの行動を思考の糧として、日本における山登りを、信仰登山から近代登山の生誕として体系づけ、部報に毎号独自の思潮を開陳している。辻論文は、幸にして稲門山岳会関根吉郎氏あたりからは評判がよかった。辻さんは若いアルピニストたちの心棒であって、そこに堀田さんたちのナンド・コートが結晶したのである。

一九三六年、辻邸にはヒマラヤを夢みる部員が日参し、Paul Bauer "Im Kampf um den Himalaya"は、辻さんがまさに先生となって輪講され、その夢は本物になっていったのである。

辻さんは、一九一六年に日本山岳会入会。推薦者は、高野鷹蔵・近藤茂吉、会員番号四八七番。入会のきっかけはW・ウェストン師にしかられたのが遠因。

辻さんが神戸二中生の時、親爺をだまして鳥水の「日本アルプス」を買い、島々谷から神河内に入る。慶大教授鹿子木員信氏・第一高等学校の大木操氏・茨木猪之吉画伯ら錚々たる面々と共に前穂の頂上に立つ。翌早朝、登頂の嬉しさも手伝って騒いでいたところ、妙なアクセントの西洋人から「静かに」とたしなめられ、一言もなく恐れ入った。

たそうだ。その日、徳本峠下の牛小舎の近くで、だんの西洋人夫妻が嘉門治を連れてくるのと出会ったところ、若いのに穂高に登ったことをほめられ「私はウェストンです。東京へ来たたら山岳会に入りなさい」とすすめられたという逸話である。

辻莊一、一九五〇年から五二年にかけて、五年に日本山岳会評議員。一九六六年の年次晩餐会の席上永年会員。一九七三年に、名誉教授。立教大学では、亡き辻莊一名誉教授を大学葬をもって送ることにした。すぐれた、J・S・バツハの研究者への敬意と、いつの時代にあっても学生にとって得難い「友人」であった人に、感謝を表してである。

(立教大学山友会・中村太郎)

河本清氏

(会員番号四〇六番)

本会最長老の一人である、永年会員河本清氏は、去る四月十一日午前二時肺炎のため、東京の自宅において逝去されました。享年九十五。茲に謹んで哀悼の意を表する次第です。

なお、この度のご不幸につきまして、久代未亡人より「九十五歳六カ月の生涯を閉じました。天寿を全うしましたしあわせを神に感謝いたしますとともに、生前故人に寄せられました山岳会の皆様のご交誼に對しまして、深く深く御礼申し上げます」旨の連絡が届きましたので併せてお知らせ致します。

(松田雄一)

追悼

JACの山行で思い出すのは昭和四十三年の蔵王山開き行であった。ハムさん(渡辺公平)から電話で「会で蔵王へ行くが一人欠員なので参加してくれないか？」に同行した。一行は会からはハムさん、米さん、折井君、松本氏と私の五名で、開山式後、残雪の南蔵王連峰を縦走したのだった。

「平ヶ岳へ行くからどう？」と電話。笠ヶ岳でも行こうと思っていた時なので約束した。二人で沼の長蔵小屋へ着いたら「今、ヘリコプターで荷あげをしている。頂上付近まで乗っていったら」と長英さん。では、と長英夫人や小屋の女子従業員も参加したいと言った。私はへりはきらいで、いつも白馬館の松沢君が「乗れ、乗れ」といつてくれたが白馬岳や唐松なら歩いた方がいいと逃げていたので、「娘子軍でどうぞ」とこの時も辞退。長英さんと小淵田代やアザミ湿原を歩いて、米さんのかえらぬ中に帰ったこともあった。

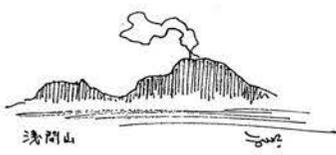
国立公園大会が毎年一回、全国のどこか公園で開かれると、いつも現地でお会いしていた。昭和四十年頃だったか、「都内の某パートで夏山相談所を開いているので、講師に」とおさそいしたら、心よく引きうけられ、なかなかられる昭和六十一年まで出席されていた。

晩年まで、よく私のつとめ先へたずねてこられた。ご尊父・弦斎

の著書を再版する新人物往来社が私のつとめ先の近くなので、その打合せの帰りによらされて、よく有楽町駅前の「レバンテ」というレストランに入った。

米さんは帽子がすきで、よく外出にはかぶられていた。細顔には似合った。お酒はたしなまれたが、タバコはきらい、案外気にしがり屋で、山登りには時々お守りを持って行かれた。十年ほど前だったか「家の方(世田谷)で笹の花が咲いたわ、いやね」と言っておられた。俳句がおすきで、旅先きからのお便りには句がつけられていた。なくなられた渋谷秀雄さんからもよく句のお便りをいただいたことを思い出す。

本籍は神奈川県平塚市、今そのお屋敷は市にうけつがれ、弦斎の文学碑も昭和三十四年に建てられ、「村井公園」として市民の憩いの場となっている。面積一万六千坪。



表C 松本アルプス山岳館保管資料(1)

番号	品名(題名)	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ ヶ数	受入年月日	寄贈者	
121	白馬岳	中村清太郎	油絵A-50 1	43. 4	武田久吉	
122	富士山麓	茨木猪之吉	油絵A-25 1	43. 4		
311	蛇腹式カク(ケース付)	武田久吉	1			
312	筋ス乾板スリ付	〃	24枚			
313	防虫網	〃	1			
314	小田原提灯	〃	1			
315	細引	〃	1			
316	脚絆	〃	1足			
317	キヲクシューズ	〃	1足			
318	アゼン(五本爪)	〃	1足			
319	アゼン(x型)	〃	片方片方			
320	アゼン(八本爪)	〃	片方片方			
321	スリ	三田幸夫	1双			
322	ピッケル	中村清太郎	1			
323	スノークラット	〃	1足			
324	登山靴	藤島敏男	1足			
459	富士登山木製御札	〃	4ヶ			
125	伊豆半島	茨木猪之吉	油絵10号 1			山里寿男 清野 恒 近藤茂吉
127	徳木峠ゆ穂高連峰	石田吟松	墨絵 1			
132	モクラン	〃	1			
136	福沢ゆ穂高1966	山里寿男	水彩画 1			
145	ツバキ 僧院	清野 恒	1			
146	ツバキの親子	清野 恒	1			
149	冬の山(清太山)	〃	墨絵 1			
190	会員スリッパ(松方)	日高・藤島	1			
191	女性登山史年譜	安彦六郎	額入写真 1	60. 8. 14.		
192	女性登山史年譜	〃	1	60. 9. 1.		
193	JAC 海外遠征年譜(1966-1985)	〃	1	〃		
198	女性登山家著書リスト	〃	1	〃		
199	スリッパ 南西壁	山田圭一	額入写真(半切) 1	〃		
202	JAC 会員分布図(JAC 60周年)	〃	1	〃	山田圭一	
203	JAC 会員分布図(JAC 80周年)	〃	1	〃		
204	大正 8年富士登山 2葉	〃	1	〃		
205	冷沢徒渉	村井米子	〃	〃		
206	西穂高	小林静子	〃	〃		
207	ハッ峰(新聞記事)	中村テル	1	〃		

○五名が登録されておりますが、このたび、三田さんの後任として私が日本支部の世話役として推せんされ、指名されました。
 ○入会手続は所定の申し込書に記入(英文)。
 ○推せん者二名必要。
 ○資格はヒマラヤ地域の登山・トレッキングの経験者など(日本人の場合は、国内での登山もこれに準じます)。
 ○会費は通常会員が入会金八ポンド(約二〇〇〇円)、年会費一ポンド(約三〇〇〇円)。終

身会員が入会金八ポンド(約二〇〇〇円)、年会費一ポンド(約三〇〇〇円)。
 (通常会員には、H・ジャーナルは無料で配布されますが、終身会員は、終身会費以外に、ジャーナル講読料として、五年毎に二四ポンド(約六〇〇〇円)を納入する必要があります)。
 ○お問い合わせは左記世話人までどうぞ。
 入会の手続き、送金など、世話人の事務局で一括してサービスを行なっておりますので、ご希望の

方は申し越し下さい。
 ハ追而VH・ジャーナルには、ヒマラヤ地域で活躍する、日本隊の情報も掲載されています。外国の一流ヒマラヤニストは、H・Cの会員になっているケースが多い割に、日本人の場合には、八〇〇〇以上の登頂者でも無関心の人が多い。
 他所の国の山登りをするには、国際的な感覚と教養が必要ですが、アジア近隣諸国との友好的なおつきあいのためにも、自分の英文の登山の記録くらいは手許に置きたいものです。
 記——
 H・C日本支部事務局

高度な科学技術に象徴される現代文明の進展の中で、今、再び「人間の根源」「人間の内的なもの」が問い直されようとしています。大地の匂と精神的なものを求めて、人々の目が徐々に東洋に向

日本山岳画協会
 本年度展開催
 7月9日(木)~15日(水)
 (日曜及15日は17:00迄)
 ○朝日アートギャラリー
 JR有楽町、地下鉄丸の内線銀座下車、中央区銀座四丁目(朝日旅行センター隣)、電話03-567-1671
 ○会員20名、20点出品予定
 ○事務所・東京練馬区東大泉
 電話 03-923-6670 藤江方
 6-12-15
 ネパール
 神々と舞踏劇展

JAC 気付
 H・C日本支部長 大塚博美
 03-703-5809 自宅V
 世話人 松田雄一
 0427-984-3398 V
 関口周也
 0427-527-904 V
 神原 達
 047-883-9389 V
 (大塚博美)

今回の企画は、現地の雰囲気

神々の玉座とも、世界の屋根とも呼ばれる、「ヒマラヤ」と「釈迦誕生の国」として知られる王国「ネパール」は、世界のアルピニストの憧れであり、古くからチベットとインドを結ぶ文化や通商の要衝として、様々な民族、文化、宗教が融合し、他に類を見ない神秘性を持つ文化を長い伝統の中で育んできました。

日本山岳会後援
 山岳写真の
 源流展開催
 日本の登山と写真の黎明期に活躍した先人の貴重な作品を集めた写真展が日本山岳会の後援で開かれる。
 河野幹蔵、志村島嶺、辻本満丸、石崎光瑠、武田久吉、冠松次郎、穂刈三寿雄、田中薫と、いずれも日本山岳会草創期、あるいは飛騨・信州の高山の開拓期に活躍した人々の作品。ガラス乾板など奇跡的に保存されていた当時の写真80点を復元・展示する。他にイタリアの世界的山岳写真家ヴィットリオ・セラの写真40点も。
 会場と会期
 7月3日~7月9日
 東京銀座富士フォトサロン

表C 松本アルプス山岳館保管資料(2)

番号	品名(題名)	作者・撮影者 使用者・編集者	種類・大きさ 枚数	受入年月日	寄贈者
208	大正11年富士登山	今井喜美子	パチ写真 1	60. 9. 1.	
209	大正12年北穂高	村井米子	" 1	" "	
210	大正12年白馬岳	今井喜美子	" 1	" "	
211	富士登山(昭2)	中村テル	" 1	" "	
212	槍ヶ岳(昭2)	今井喜美子	" 1	" "	
213	劍岳(昭2)	黒田初子	" 1	" "	
214	鹿島槍(昭4)	村井米子	" 1	" "	
215	松本駅(昭8)	中村テル	" 1	" "	
216	岩原 ｽｰｰ場(昭12)	中村テル	" 1	" "	
217	蔵王 ｽｰｰ場(昭12)	川森左智子	" 1	" "	
218	八方尾根(昭13)	黒田初子	" 1	" "	
219	登山ｽﾌﾞﾙ	川森左智子	" 1	" "	
220	富士山(昭24)	坂倉登喜子	" 1	" "	
221	赤岳(昭24)	"	" 1	" "	
222	鹿島槍(昭32)	"	" 1	" "	
223	北アルプｽ ｽｰｰ(今井他 5名)	新聞記事	パチ 1	" "	
224	北アルプｽ ｽｰｰ(今井他 5名)	写真	パチ写真 1	" "	
422	女性登山史(1)	婦人懇談会	パチ 1	61.12. 3.	
423	女性登山史(2)	"	" 1	" "	
424	女性登山(服装の移り変わり)				
425	がりりんかん	佐藤知恵子	ｽｯｼﾞ 1	" "	
426	かぢんじゅんが	がりりんかん遠征隊	パチ写真 3枚	61. 8.31.	東海支隊隊 かぢんじゅんが
246	グマ ｼﾞｯｸﾙ	中川喜久雄	パチ写真 20枚	60.10. 1.	中川喜久雄
250	二村ｼﾞｯｸﾙ	折井健一	" 1	" "	折井健一
252	渡辺ｼﾞｯｸﾙ(大正9年特製)	芳野幹一	" 1	60.12. 1.	芳野幹一
260	アイスマンｼｯﾌﾟ ｼﾞｯｸﾙ(東京 戦後作)		" 1	61.12. 3.	平柳一郎
261	ガシマ ｼﾞｯｸﾙ(戦前作)		" 1	" "	"
262	無銘 ｼﾞｯｸﾙ(大正末期作)		" 1	" "	"
271	防風帽	女子 ｲｽﾞﾓﾄ隊	登頂時装備	61. 8.10.	田部井淳子
273	目出帽	"	" 1	" "	"
274	酸素マスク	"	" 1	" "	"
275	ｲﾝｼﾞｰﾚｰﾀｰ	"	" 1	" "	"
276	酸素ｷｯﾊﾟ	"	" 1	" "	"
277	ﾖｯｸ 上衣	"	" 1	" "	"

再現した会場の中で、カトマン
ドゥ盆地の生活文化と山岳民族
シエルパ族の生活文化に焦点をあ
て、民俗資料展示および宗教舞踏
団のパフォーマンス公演によって
立体的に構成するもので、この独
特なネパールの文化、宗教、そし
て人びとの生活を浮彫りにしてゆ
きます。
日時 七月三十一日(金)
八月十一日(火)
場所 京王百貨店新宿店 八階
読売新聞社主催・本会等後援

OA委員会からのお願い
会員管理ならびに公益法人の会
計処理システムを導入してから、
ちょうど一年になりました。一応
まがりなりには稼働しております
が、今後応用編として種々のプロ
グラムを作ることが課題として残
されております。
つきましては、会員各位の中
で、FACOM 980-IIのAPC5目
プログラミンングにつき、ご協力載

ける方がおいででしたら、是非
参画をお願い申し上げます。
ご連絡をお待ちしております。
報告
・京都支部日より
比良・蛇谷ヶ峰
スキー行
京都支部発足後、初めてのスキ
ー山行を一月三十一日から二月一
日に比良・蛇谷ヶ峰にて参加者二
十一名で行ないました。

【連絡先】(自宅) 0427-26-2338
(勤務先) 03-553-0821
(松田雄一)

車に分乗して滋賀県北部の朽木
スキー場に夕方到着、駐車場上の
台地にテント五張りの設営を終る
頃にはみぞれは雪に変わる。狭い
テントでも楽しい宴。夜半の積雪
は約30cm。
翌日はグレンデ組数名を残し出
発、昼前に頂上へ。昼食の後、プ
ッシュの中をスキー滑降。グレン
デに集合、乾杯の後解散となる。
京都支部は山スキー愛好者も多
く多数の参加者を得た。来期も良
い山を選んで支部の定例の催しと
したい。

参加者 秋野子弦、新道弘之、荒
木真弓、岩坪五郎、岩坪吟子、上
原泰行、大槻雅弘、小山貢、阪本
公一、四手井靖彦、杉山イタル、
須藤建志、直哉、関本俊雄、高木
志茂子、西川頌、三橋勉、横田明
男、京大山岳部(内藤、前田)、
会員外一名 (杉山イタル)

**図書室の利用と
現状について**

事務局では、図書委員会の了解
を得て、昨年十二月から今年三月
末まで「図書利用頻度アンケート」
を実施し、その結果をまとめ
ましたので報告いたします。
データは別表のとおりです。

別表

利用人数	年齢層(人)		曜日頻度(回)	時間帯(人)		利用図書分布(回)
	学生部	20~50		12~14時	15~18時	
12月 18	2.1	4.0	6	9	10	22
1月 18	2.1	4.0	8	14	2.4	41
2月 20	2.1	4.0	4	4	2.4	9
3月 13	2.1	8	6	11	2	12

実施時期は年末年始、年度末に
かかりますが、一方、冬山シーズ
ンであり、また休日を利用した登
山準備の時期にあたります。利用
者数は六十九名で、少ないように
思えますが、以上のような理由か
ら特に時期的偏向を考慮する必要
はないと思います。用紙に記入せ
ず利用した人も若干おりますし、
また会員外で、マスコミ、出版関
係の人の資料閲覧が六件あったこ
とも付け加えておきます。利用人
数から見ると、会員内よりも対

表C 松本アルプス山岳館保管資料(3)

番号	品名(題名)	作者・撮影者・ 使用者・編集者	種類・大きさ ヶ数	受入年月日	寄贈者
278	オーブズン	女子 エルスト隊	登頂時装備 1	61. 8. 10.	田部井淳子
279	ミソ	"	" 1双	"	"
280	オーブシューズ	"	" 1足	"	"
281	アイゼン	"	" 1足	"	"
282	背負子	"	" 1	"	"
283	リュック	"	" 1	"	"
284	リュック	"	" 1	"	"
285	登山靴	"	" 1足	"	"
307	酸素マスク	マクス隊	1	"	"
308	クレーンアイゼン	ボツ隊	1	"	"
309	カマヒ	"	3ヶ	"	"
310	美津濃アイゼン	中川喜久雄	1足	61.10. 1.	中川喜久雄
325	シュレフ	藤島敏男	1	61. 3. 17.	望月達夫
326	ポンチョ(米軍放出品)	望月達夫	1	"	"
327	登山靴(双葉製)	望月達夫	1足	"	"
328	登山靴	藤島敏男	1足	"	"
329	リュック(梓村)	藤島敏男	1	"	"
330	リュック(梓村)	(バグナス製)	1	"	"
331	キリング(本体=片桐;背負皮=佐藤久製)	望月達夫	1	"	"
332	リュック	藤島敏男	1	"	"
334	小田原提灯	武田久吉	1	"	"
335	脚絆	"	1	"	"
366	複写書籍	"	1束	61. 3. 17.	"
398	硯石	山梨梨三富村	1	31. 9.	佐藤君三 辻村太郎
399	至仏山石	"	1	"	"
400	剣沢モレーン	"	1	"	"
404	ナンダペイ トロース登山隊記念楯(イフ製)	JACナンダペイ隊	1	51.	"
405	ナンダペイ トロース登山隊記念楯(日本製)	JACナンダペイ隊	1	51.	"
406	1976 UIAA 記念品	"	2ヶ	51.	"
407	1981 IMF記念品	"	1	56. 8. 26.	サソ氏
408	1970 JMAA 記念品	JACエルスト隊	1	45.	"
409	韓国山岳会記念品	韓国山岳会	1	46. 10. 24.	崔 昌烈
410	エルスト 登山隊 1973	イタア山岳会	1	48.	"

外的に山岳専門図書館として期待されていると考えられます。年齢別利用者では、学生部が全体の三割に達しますが、いわゆる現役登山者の利用が最も多いという点で、利用されている図書の方もおおよそ推定できるといえます。

利用図書分布で最も多いのは「山と溪谷」、「岳人」、「岩と雪」などの和雑誌で、さらにその内訳に登山隊の報告書(十回)を含んでおり、一次的な記録を求めている

ることがわかります。また「山岳(五回)や部報(五回)もあり、これは古い記録の掘りおこしでしょうか。」

外国書を含む書籍のうち1/3はヒマラヤとアルプス関係のもので、和書の中でも「日本登山大系」などの記録集の利用頻度が高い。

地図では「世界山岳地図集成」が度々利用されている。また書誌の利用も必要な記録を早く見つけるためのものと考えられます。さらにこれらの記録文献類はコピー

をとって利用される傾向が多い。

◎利用者から図書室への要望

- * 充実して欲しい図書: 技術書、スキー、各山岳会の会報類、海外登山報告書、内外のガイドブック、洋書全般、外国登山隊の新しい報告書
- * 分類や配置、その他建設的な意見: 利用頻度の高い各雑誌の索引を作って欲しい。山城ごとの配置、リフレンス類の作成、図書の貸し出し、コピーを安く。

(見玉 茂)

会務報告

四月理事会

4月14日午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、鳴原、橋本、大橋、浜口、梅野、高遠、岡沢、大森、平井、太田、絹川、関塚各理事、山本監事、松田、中村、山口各評議員
委任 新井理事

審議事項

◎昭和六十一年度事業報告(案)承認の件 原案承認

◎昭和六十一年度収支決算(案)および財産目録承認の件 原案承認

◎監査報告 監事より四月七日に監査の結果、正確妥当であるとの報告あり

◎昭和六十二・六十三年度役員(理事・監事)、評議員候補者選出の件

評議員候補者について理事会より推薦、理事・監事候補者については四月十四日午後四時より開催の評議員会で推薦された 承認

◎総会提出議案について
昭和六十一年度事業報告および収支決算・財産目録承認の件、昭和六十二年度事業計画(案)および収支予算(案)承認の件、昭和六十二年と六十三年度理事・監事および評議員選任の件、昭和六十二年除籍の件 承認

ルーム日誌

4月

◎杉本誠氏の「山岳写真の源流展」名義後援の件
報告事項
◎各委員会報告
◎三国合同登山関係報告

了承



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

◎講演と映画の会

日時 六月二十三日(火)

午後七時より

場所 日本山岳会集會室

演題 北千島昭和初年の頃の山旅
(シムシュ島、アライト島、パラムシル島など、昭和九年頃の記録映画十五分と、お話)

講師 佐々保雄氏

海外委員会

◎カナダキャンプ

カナダで秋のキャンプに参加してみませんか。中高年向の楽しい

- 7日 監査
- 13日 常務理事会、常任評議員会
- 14日 評議員会、理事会
- 15日 山研委、山岳編集委
- 16日 学生部総会
- 20日 フィルム委員会
- 21日 自然保護委、婦人懇、図書委員会
- 22日 海外委、博物館を考える会

- 24日 科学研究委
- 27日 講演会―白頭山(海外委)
- 30日 会報編集委
- 四月来室者386名
- 会員異動
- 退会
- 長崎北稜会(八七二三)
- 田辺良英(六一七七)

- 出掘光明(六九四五)
- 荒谷一郎(五四一一)
- 高山末吉(八七〇五)
- 物故
- 河本 清(四〇六) 4・11
- 辻 莊一(四八七) 4・21
- 水越誠一(二二一〇) 61・11・4

キャンプ生活がカナダ山岳会の主催で行なわれます。場所はバンフから車で三十分ぐらいの美しい処です。

①九月十二日～十九日

九月十九日～二十六日

レイク・オハラ エリザベス・パークヒュッテ泊 一五四

②九月二十六日～十月十日

カンモア クラブハウス泊 一二四

※詳細は海外委員会・早川(電〇三三〇七一九九一)まで

海外委員会

◎火山についての講演会と探索山行

講演会

六月二十三日(火) 午後七時より

◎講演会 六十二年六月二十六日(金) 午後七時より

講師 気象庁地震火山部、澤田可

洋氏
演題 火山の活動と火山災害―火山の観測と活動予知、山歩きの注意、その他

◎探索山行

六十二年七月十八日(土) 十九日(日)

行き先 吾妻山群の吾妻小富士、一切経山の噴気地帯

講師 澤田可洋氏

探索現地講義 火山観測の仕方、火山の表面現象、登山中に注意すべき前兆現象、その他

探索山行は六月二十六日まで

ハガキで、日本山岳会科学委員会あてお申込み下さい。

六十二年七月十八日(土) 午前

一〇・〇〇 国鉄 福島駅 西出口

(新幹線口) 集合、マイクロボ

スで新野地温泉相模屋旅館へ。

昼食後、鬼面山登山、相模屋泊。

七月十九日(日) バスで浄土

平へ。探索山行の後、路線バス

で午後五時頃福島駅着、解散。

費用 十八日の昼食と十九日の

昼弁当を含め、交通費別で凡そ

九千円程度の見込み。

相模屋旅館は、千九六〇―二

福島市土湯温泉町野地二

〇二四二一六四―三六二四

申込み後、とり消しは七月十一

日までで願います。それ以後不

参加の方は三千円お払い下さ

い。科学研究委員会

◎第30回(最終回)

昭和三十三年第一回もみじ会に

来、本年度で三〇年目を迎え、ひと

区切りを致すことになりました。

本年は東海フォレスト(パルプ)

の協力で同社所有の、昨年浩宮様

がお泊りになった二軒小屋ロッジ

を借り、南アルプス山中でのお

いしい空気と同社自慢の料理を堪能したいと思

で二時間、六名乗ジープをチャーターします。静岡に行かず転付峠を越される方には地元で同行致します。

期日 十月十日、十一日

集合 静岡駅南口観光バス駐車場

十月十一日、二日、出発十一

三〇。十一日静岡駅着予定十

七・三〇

会費 静岡駅まで往復も含めて

一五〇〇円

ロッジ収容五十三名ですので、

支部員も含み五十三名で切ら

せて頂くので、ご希望に沿い兼

ねる場合も有りますので、ご承

知下さい。

申込 本、支部員に拘らず日本山

岳会静岡支部の郵便振替口座名

古屋四二二六一〇への振込み

を以て申込みとします。

※申込には住所、氏名、電話番号、郵便番号、会員番号、十一日

の行動希望を必ずお書き下さい。

昭和六十二年六月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイム四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座 東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一三二六

印刷所 株式会社 技報堂

赤坂グレースビル